2018（平成 30）年度卒業研究

弘前大学人文学部 人間文化課程 アジア文化コース

装束贈答の意義についての考察

―贈り手の感情を中心に―

木村瑞希（日本古典文学ゼミナール）

序章

本論文では日本古典文学作品における装束の贈答場面から、特に贈り手が装束に込める感情に注目して装束贈答の意義について考察する。装束の贈答とは、一般的に相手に対する褒美や祝儀として装束を贈ることであり、古典文学作品には相手への称賛や、祝う感情で行われる装束贈答の場面が多く見られる。しかし一方で、単純に相手への好意とは言い切れない複雑な感情が込められた装束贈答も行われていることに気がついた。そこで、装束贈答に対して贈り手が込めた様々な感情を分析して、装束贈答の意義を考察するのが本論文の目的である。

はじめに、装束贈答の意義を論じた先行研究を紹介する。主に、装束が他の物の代替として贈られていた点を論じるものと、装束に込められた贈り手の感情を分析した論の二つがある。

前者は、民俗学者の折口信夫氏が、装束には人の魂が宿るため贈答行為は衣服を媒介として魂を贈ることであると論じている[1]。同様に梅村喬氏は、『うつほ物語』「忠こそ」の装束贈答場面から、衣服が交換価値をもち、金銭の代替とされていたことを指摘している[2]。

後者は、歴史研究から饗場宏氏・大津透氏が、『続日本紀』の饗宴の場で道鏡が臣下に、政治的なねらいで装束を贈っていることを指摘している[3]。また、『源氏物語』に記される多くの装束贈答場面で、贈り手の感情を分析した様々な先行研究がある。畠山大二郎氏は玉鬘が自身の香りがついた装束を薫へ贈った場面に薫に対する恋愛感情を分析し（竹河）、紫の上から朱雀院への装束贈答（若菜）が必要以上の豪勢な装束を贈っている理由を朱雀院に対する不満と恨みの感情と分析した[4]。また柳瀬あや子氏は、光源氏が末摘花へ風流な装束を贈る場面に光源氏のいたずら心を読み取り（玉鬘）[5]、熊谷あや子氏は風流な装束は末摘花には派手すぎて似合わないとの光源氏の苦笑に注目する[6]。鈴木裕子氏は、薫から中の君へ豪華衣装を贈り続ける薫の行為は中の君を我が物にしたいという気持ちの表れだと分析する（宿木）[7]。このように先行研究において、装束贈答の意味は様々に論じられているが、本論文では、中でも装束の贈り手の感情に注目し、分析する。

本論文では、これらの先行研究をもとに、贈り手が装束贈答に込める感情を、相手を援助しようとする感情、相手に対する恋愛感情や、相手と手を結ぶことで政治的に有利に立ちたいといった、相手と何らかの人間関係を深めようとする感情、相手への好意に留まらない複雑な感情の三つに分類し、分析してゆく。[8]

第一章　相手を援助しようとする感情を伴う装束贈答

第一章では困窮する人を援助しようとする感情を込めて行われる装束贈答を、『うつほ物語』、『源氏物語』、『落窪物語』から用例を挙げて考察した。『うつほ物語』「忠こそ」の巻には、修行中に食料が尽きてしまった山伏とその弟子たちに対して忠こそが装束を贈る場面がある。この点については梅村喬氏が、衣

服は交換価値をもち、金銭の代替とされていたことを論じていることから、装束を市場に持って行った目的が食べ物との交換であることが注目される。忠こそは装束を食べ物と交換させて飢えから救うことを目的として山伏に装束を贈ったと考える。また、『源氏物語』「末摘花」巻には、末摘花の困窮ぶりに同情した光源氏が末摘花や女房、門番に対して装束や仕立てる前の生地を贈る場面や、新しい装束を揃えられない末摘花に対し、光源氏が若い女性が好むような装束を贈って生活を援助しようとしている場面が見られる。同様の場面として『落窪物語』には、困窮のため着る服に困っている落窪の君に北の方が装束を贈り、生活を援助しようとする場面が見られた。このように、贈り手が困窮する人を援助しようという感情を込めて装束贈答を行う場合について確認した。

第二章　相手との人間関係を深めようとする感情を伴う装束贈答

　第二章では、相手との人間関係を深めたいという感情を込めて装束を贈る例を考察した。第一節では相手に対する恋愛感情を伴う装束贈答として、『万葉集』、『源氏物語』から用例を挙げた。『万葉集』巻八の大伴家持が詠んだ歌は、妻である坂上大嬢から贈られた装束を妻の形見として家持が大切にするといった内容であり、大伴家持が坂上大嬢を想う気持ちが読み取れた。『源氏物語』「竹河」巻の玉鬘から薫への装束贈答の場面では、玉鬘の香りが染みついた装束は玉鬘そのものを表しており、薫に対する恋愛感情が込められていたことを述べた。『源氏物語』「宿木」巻の、中の君に対して豪華な装束を贈り続けるという薫の行為からは、中の君への強い恋愛感情が読み取れた。第二節では相手との政治的関係を強固にしたいという感情を込めて行われる装束贈答を考察した。『続日本紀』神護景雲三年(七六九)正月七日条の道鏡が臣下に装束を贈った場面から、天皇の座を目指す道鏡が、臣下との関係を深めようとして装束を贈った

ことを確認した。また、『うつほ物語』「国譲」上巻の梨壺と藤壺による皇太子の即位争いの場面では、装束贈答の有無が即位争いの勝敗に関わっていた。したがって、装束を贈ることで贈り手の政治的立場を有利にしたいという感情が込められていたことを明らかにした。

以上のことから、装束の贈答において、装束の贈り手が相手との人間関係を深めたいという感情を込めて行う場合があることを分析した。

第三章　相手への複雑な感情を伴う装束贈答

第三章では、相手への好意や善意とは異なる、複雑な感情を込めて行う装束贈答について考察した。第一節では相手に対する不満、恨みの気持ちを込める装束贈答として、『源氏物語』「若菜」上巻における紫の上から朱雀院への装束の贈答場面を挙げた。ここでは紫の上が朱雀院に贈った「女の装束に細長を添えたもの」に注目した。饗宴の場で装束を贈る際は身分によって内容の差別化をするという決まりがある。一番身分の高い人物には女装束と細長が贈られ、細長を添えた女の装束は、最も豪華な贈り物ということになる。またこうした豪華な贈り物が行われる状況を調査したところ、饗宴や行事、何かを祝う場で贈られるものであることを確認した。一方、紫の上による装束贈答はそのような状況には当てはまらない。そこで、紫の上の贈り物は、必要以上に豪勢なものであること、そしてこの不相応な装束贈答は、紫の上が身分の高い朱雀院に対して強い不満・恨みの気持ちを間接的に伝えたものであるとの結論に至った。第二節では相手を嘲笑する気持ちを込める装束贈答として、『源氏物語』「玉鬘」巻の光源氏から末摘花への装束の贈答場面を挙げた。光源氏が女君たちに正月の晴れ着用の装束を選んで贈る衣配りの場面で、光源氏は末摘花の装束を選びながら苦笑したことから、この装束贈答には単なる愛情とは言えない、複雑な感情

が込められていたのではないかと考えた。そこで、光源氏が末摘花に選んだ「唐草模様の柳の織物」に注目して分析した。唐草模様については、先行研究において、末摘花と「唐」の関係が注目されていたが、本論文ではさらに柳について、『源氏物語』で美しい髪の毛の例えとして「柳の糸」という語が用いられていたことを明らかにし、美しい髪の毛を持つ末摘花との関連を指摘した。「唐草模様の柳の織物」は末摘花を連想させ、末摘花に似合う、ふさわしい装束であることを示した。しかし、末摘花の美しかった髪の毛が年月の経過により衰えてしまったため、ふさわしいはずの装束が似合わなくなってしまった。光源氏は末摘花の醜い容貌と美しい装束との不調和を嘲笑しているのではないかと考えた。

以上のように第二章では、装束贈答には、贈り手の好意とは異なる複雑な感情が込められる場合があることを考察した。

結章

本論文では日本古典文学作品における装束の贈答場面から、特に贈り手が装束に込める感情に注目して装束贈答の意義について考察した。装束贈答が相手に対する褒美や祝儀という役割に留まらず、贈り手が様々な感情を相手に伝えるための手段であったとの結論に至った。今回は装束の贈り手の感情について検討したが、受け手の感情についても分析し、装束贈答の意義についてより深めていくことが今後の課題である。

主要参考論文一覧

・梅村喬「饗宴と禄―“かづけもの”の考察―」(『歴史評論』四二九、一九八六年一月)

・饗場宏・大津透「節禄について―「諸節禄法」の成立と意義―」(『史学雑誌』九八・六、一九八九年)

・畠山大二郎「『源氏物語』の被け物―「若菜上」巻「女の装束に細長添へて」の表現を中心に―」(『文学・語学』二〇二、二〇一二年三月)

・鈴木裕子「紫式部の表現世界・『源氏物語』と『紫式部日記』と―「贈り物」の視点から―」(『紫式部の方法』笠間書院、二〇〇二年)

・熊谷あや子「平安朝文学における色彩と美意識―源氏物語・末摘花について―」(『日本文学』五一、一九七九年二月)

・柳瀬あや子「『源氏物語』衣配りにみる衣装観―人物の象徴としての衣装の色目―」(『神戸ファッション造形大学神戸文化短期大学研究紀要』三一、二〇〇七年三月)

---

[1]嶋中鵬二『折口信夫全集二』(中央公論社、一九六五年)の「ほうとする話」に「鎭魂式に先だつ祓への後に、舊霊魂の穢れをうつした衣を、祓への人々に與へられた。此風から出て、此衣についたものを穢れと見ないで、分裂した魂と考へる様になつた。だから、平安朝には、歳暮の衣配りの風が行はれた。春衣を與へると言ふのは、後の理曾で、魂を頒ち與へるつもりだつたのである。即、みたまのふゆの信仰である。」とある。

[2]梅村喬「饗宴と禄―“かづけもの”の考察―」(『歴史評論』四二九、一九八六年一月)による。

[3]饗場宏・大津透「節禄について―「諸節禄法」の成立と意義―」(『史学雑誌』九八・六、一九八九年)による。

[4]畠山大二郎「『源氏物語』の被け物―「若菜上」巻「女の装束に細長添へて」の表現を中心に―」(『文学・語学』二〇二、二〇一二年三月)による。

[5]柳瀬あや子「『源氏物語』衣配りにみる衣装観―人物の象徴としての衣装の色目―」(『神戸ファッション造形大学神戸文化短期大学研究紀要』三一、二〇〇七年三月)

[6]熊谷あや子「平安朝文学における色彩と美意識―源氏物語・末摘花について―」(『日本文学』五一、一九七九年二月)による。

[7]鈴木裕子「紫式部の表現世界・『源氏物語』と『紫式部日記』と―「贈り物」の視点から―」(『紫式部の方法』笠間書院、二〇〇二年)による。